「桃太郎」物草双紙考

松原哲子

はじめに

草双紙の流れを大掴みにする際、現在の文学史では安永四年（一七七五）を境に前後を分割する方法をとる。これは黄表紙評判記『菊寿草』序文（天明元年〈一七八一〉刊、宇鱗著、大田南畝跋）にみえる、『金々先生栄花夢』（恋川春町作・画、鱗形屋板）の刊行を機に鱗形屋板草双紙の性質が大きく変わったという記事に依ったものである。よって、この区分は鱗形屋板草双紙の変遷に基づいている部分が大きいといえ、他の板元のものを含めた草双紙全体にそのままあてはまると断定できないという問題を孕んでいる。

ただし、『菊寿草』の記載以外にも、『金々先生栄花夢』以降、それまで草双紙の担い手ではなかった新しい作者によって続々と生み出された草双紙を、既存の作者のものと分けるという認識を、作品中に示す草双紙が多数存在している。

例えば、天明二年（一七八二）刊『手前勝手／御存商売物』（山東京伝作・北尾政演画、鶴屋板）は、江戸の絵草紙屋の勢力争いを描いた異類物で、作中、上方下りの八文字屋本と行成表紙絵本が、江戸の青本（黄表紙を指す）や洒落本などの流行をねたみ、赤本・黒本を利用して青本たちを陥れようとする。既に時代遅れになってしまった赤本・黒本は八文字屋本たちの口車に乗ってしまう。

天明三年（一七八三）刊『草双紙年代記』（岸田杜芳作、北尾政演画、泉市板）は、小野小町の雨乞い伝説を題材に、

各場面毎に異なる作者と絵師を設定して書き入れや画風を変えている。前半は鱗形屋板で鳥居派の絵師、富川吟雪、丸小板で丈阿という展開で黒本青本の設定となっており、後半で物語の舞台が転じた後は、恋川春町・伊庭可笑・芝全交・南陀伽紫蘭・市場通笑・朋誠堂喜三二という、いわゆる黄表紙作者の設定となっている。

これら二作品のように、草創期から作品刊行当時に至るまでの草双紙の変遷を強く意識した、年代記的な要素を持つ草双紙では、赤本や黒本といった初期草双紙の作り手による作品と、新興の黄表紙作者の作品とを別個のものとする認識が示されている。[注1]

また、他の黄表紙においても、天明四年（一七八四）刊『従夫以来記』（竹杖為軽作、喜多川歌麿画、蔦屋板）にみえる、「丈阿がそうしに大木の切口でふといの根ときてがてんか〳〵など、申はいたつての古ぶんじて」のように、黒本青本の作者やその作品を古くさいもの、懐かしいものとして取り上げる例が目立つ。

よって、黄表紙の作中での赤本・黒本への評価を見る限り、草双紙が黄表紙時代に入って変質したという文学史での位置付けは妥当であるようにみえる。

しかし、これらの例は、大田南畝・恋川春町・山東京伝といった、それまでの草双紙の担い手ではなかった人々が作品中に表現したものである。「赤本・黒本青本＝古くさい、懐かしいもの」という表現が黄表紙に繰り返し使用されているという現象は、これが趣向のひとつとして定型化したことを示しているのであって、草双紙の実態そのものを示すものではない。[注2]

そこで本稿では赤本・黒本青本・黄表紙までの草双紙の様相を探る試みとして、草双紙全般に亘って材に採られた「桃太郎」の草双紙を取り上げ、検討する。

一　「桃太郎」物の赤本・黒本青本・黄表紙

「桃太郎」を題材に採ったり、趣向に取り入れている草双紙に関する研究は、先学によってこれまでなされてきた。中でも、内ケ崎有里子著『江戸期昔話絵本の研究と資料』（平成十一年、三弥井書店）は、「桃太郎」「舌切雀」「花咲爺」「かちかち山」「猿蟹合戦」という、いわゆる「五大昔話」を題材とする草双紙ついて、その昔話絵本としての側面について詳細な検討がなされている。

そこで、先行研究によって紹介がなされているものを中心に、「桃太郎」の世界を何らかの形で作中に摂取している、赤本から黄表紙までの草双紙を挙げてみたい。

書名の上に○印を付したものは『江戸期昔話絵本の研究

と資料』で、内ケ崎氏が「桃太郎」の型（婆が川で桃を拾う、桃太郎誕生、桃太郎力自慢、猿・犬・雉を供にする、鬼退治）にあてはまるものとしたもの、●印は同氏が発端噺や後日噺など、「桃太郎」噺の広がりの定着を反映させたものとして紹介したものを指す。また、★印は同書には挙げられていないが、『黄表紙総覧』（『日本書誌学大系』四十八、昭和六十一年、青裳堂書店）等の先行研究によって紹介されるなど、桃太郎を趣向や題材に採っていると確認できるものである。それぞれ刊年、書名、巻数、画作者名、板元の順に整理し、最後にその内容を簡略に示した。

刊年未詳（赤本）

○『むかし〳〵の桃太郎』（一巻、藤田秀素筆、稀書複製會本）

→「桃太郎」の基本の形に忠実なもの。

○※安永六年刊『再板／桃太郎昔語』と同板の先行の赤本が刊行されたか。

宝暦九または十一年（一七五九・一七六一）

●『後日／百太郎寿草紙』（三巻、鳥居清満画、鱗形屋板）[注3]

→百太老の娘桃園は、日ごろ雉や犬になつかれている。隣人のふたます婆は息子五喜平を桃園の婿にと望むが、桃園は「弥助」と名を変え、身をやつした平惟盛と恋仲である。最後は雉・犬に加え、五喜平の飼っていた猿も桃園に味方をし、両人は結ばれる。

宝暦末～明和末年ごろ

★『あんぽんたん』（三巻、富川房信画、奥村板か）[注4]

→正直爺丹右衛門の致富譚。数種の短い話をひとつにまとめている。丹右衛門の妻が川で拾った茗荷を夫婦で食し、若返った二人の間に息子丹七が誕生する。丹七は桃太郎に倣って鬼が島に旅立つ。

明和五年（一七六四）

●『風流／桃太郎柿太郎／勇力競』（三巻、画作者未詳、鶴屋板）[注5]

→正直夫婦と邪険の夫婦が川でそれぞれ桃と柿を拾って食し、若返った結果桃太郎と柿太郎が誕生する。柿太郎は桃太郎に先んじて蛙・烏・蟹を供に鬼が島に乗り込むが、生け捕りにされてしまう。後から猿・犬・雉を供にやってきた桃太郎は、鬼を退治し、財宝を手に入れて帰郷する。柿太郎は非礼をわびて桃太郎の家来となる。

明和七年（一七六六）

★『昔噺／祖父と婆々』（三巻、鳥居清経画、村田屋板）[注6]

→川を流れてきた南瓜を爺婆が食し、男女の双子千太

郎・おきみが誕生する。千太郎は鬼が島で鬼を退治して財宝を手に入れ、おきみは改名して笠森おせんとなる。

刊年未詳（黒本青本）

●『桃太郎後日合戦』（四巻、画作者・板元未詳）

→後日譚。桃太郎の息子桃太郎は、桃井という娘にほれ、山中屋金太郎をはじめ五人の子供の協力を得て手に入れ、幡髄長兵衛の元に身を寄せ、祝言を挙げる。その後、桃井の元に変化が現れ、桃太郎は弟桃次郎や五人の子供、猿、犬、雉と共に鬼が島に向かう。

安永五年（一七七六）

●『風流／桃太郎手柄話』（三巻、画作者不明、伊勢幸板）

→桃を授けられる夢を見て懐胎した女から生まれた桃太郎が、猿・犬・雉を伴って、人から生まれ捨てられた鬼の子悪童子を退治する。

★『往古新口／桃登酒雀道成寺』（二巻、鳥居清経画、松村板）

→猿が蟹・臼・栗等に襲われるところに雉が現れ、かつて仲間であった縁から助命を願い出る場面がある。

★『むかし〳〵さるとかに』（二巻、鳥居清経画、村田屋板）

→蟹が猿に仕返しをしようとする場面に、「これは昔、鬼が島へ桃太郎という日本一のきびだんことい ふをこしらへて手柄をいたし、我々もそのよふにいたし、四国へ渡りませふ」とある。

安永六年（一七七七）

○『再板／桃太郎昔語』（二巻、西村重信画、鱗形屋板）[注7]

→「桃太郎」の基本の形に忠実なもの。冒頭に火鉢を囲んだ少年たちの図が入る。

●『桃太郎後日噺』（二巻、朋誠喜三二作、恋川春町画、鱗形屋板）[注8]

→後日譚。十六歳の桃太郎は、鬼が島から白鬼を連れ帰る。白鬼と猿は、桃太郎と共に元服し、それぞれ当世風の身なりになる。下女のお福は鬼七に惚れるが、猿六は横恋慕する。

●『桃太郎かんこの鳥』（三巻、富川吟雪画、西村屋板）

→桃を食べて若返った爺婆が桃の木の根元で子供を見つけ、桃太郎と名付ける。大力の桃太郎は鶏・猿・犬と共に鬼が島へかんこの太鼓を取り返しに行く。

安永七年（一七七八）

★『安永七郎犬福帳』（二巻、物愚斎於連作、蘭徳斎春童画、鱗形屋板）

↓後日譚。鬼が島退治の武勲によって桃太郎は武士にとりたてられ、犬も安永七郎の名を与えられる。それをねたんだ猿は、雉と共に騒動を起こす。

安永八年（一七七九）

●『桃太郎元服姿』（二巻、市場通笑作、鳥居清長画、奥村屋板）

↓後日譚。桃太郎に財宝を奪われた鬼たちは、取り戻そうと赤鬼の娘おきよを間者として送り込む。しかし、おきよは桃太郎に懸想してしまう。

安永九年（一七八〇）

●『桃太郎宝噺』（三巻、北尾政美画、村田屋板）

↓桃太郎の後裔が宝を売り払った金で吉原通いをし、無一文になる。遊女と隠れ蓑笠を被って駆け落ちするが失敗し、見世物小屋に出されてしまう。

●『十二支鼠桃太郎』（三巻、文渓堂作、北尾政美画、岩戸屋板）

↓白鼠の夫婦が子宝を願って大黒天に祈願し、庭の桃を食して懐胎し、桃太郎が誕生する。桃太郎は大黒天の告げに従って未・申・酉等の十二支を伴い、猫又を退治する。

天明元年（一七八一）

○『桃太郎一代記』（五巻、北尾政美画、村田屋板）[注9]

↓桃太郎が鬼が島に鬼退治に出かけるが、鬼たちの手許には財宝が無い。そこで桃太郎一行は鬼ヶ島の両国で鬼娘と船遊びをし、色里見物の後、財宝を手に入れて故郷に帰る。

天明二年（一七八二）

●『昔咄し虚言桃太郎』（三巻、伊庭可笑作、鳥居清長画、岩戸屋板）[注10]

↓後日譚。桃太郎・舌切雀・浦島太郎・花咲爺を綯い交ぜにする。

天明三年（一七八三）

★『現金猿が餅』（二巻、市場通笑作、松村板）

↓後日譚。桃太郎の鬼が島退治から帰った犬は、酒屋を始めるが、貸し倒れに泣く。それを見た猿は、現金商売の餅屋を始める。

★『能息子内栄』（三巻、市場通笑作、奥村屋板）

↓桃を食べて若返った茂平夫婦の子茂太郎は、後に太郎吉と改名して仲間と共に伊勢参りに旅立つ。島原に立ち寄り揚げ詰めとなった太郎吉は、遊女白玉を身請けし、子を桃太郎と名付ける。

★『押懸竜宮の御客』（三巻、三越乳堂百川作、古面堂未通画、松村板）

↓桃太郎の子で医者の玉庵が龍宮を訪ねる。桃太郎・

浦島太郎・海彦山彦・猿の生き肝・面向不背玉を綯い交ぜにする。

天明四年（一七八四）

●『親動性桃太郎』（三巻、芝全交作、鳥居清長画、鶴屋板）

→後日譚。桃太郎の妻お柿が川で拾った梅干しから年老いた梅干爺が生まれ、夫婦は父親として養育する。

●『歳々花似当年積而／八代目桃太郎』（三巻、古川三蝶作・画、伊勢治板）

→桃太郎の八代目にあたる桃八は、家宝の打出の小槌を百両で大名に売り、贋物だとして捕らわれる。そこに大黒天が現れ、本物の小槌と取り替え、結局八百両の買い上げとなる。桃太郎は大黒天を篤く信仰する。

★『桃太郎再駈』（二巻、朋誠堂喜三二作、恋川春町画、鱗形屋板）[注11]

→後日譚。鬼が島から帰った桃太郎は、手に入れた財宝を見世物にする。

天明五年（一七八五）

●『金太郎桃太郎／昔々噺問屋』（一巻、恋川好町作、北尾政美画、蔦屋板）

→後日譚。金太郎・桃太郎両人が鬼退治から帰り、葛籠を開けると化物と七福神が現れる。花咲爺・舌切雀等昔話の主人公の吹き寄せ。

★『爺山柴刈婆川洗濯／鬼崛大通話』（三巻、朋誠堂喜三二作、喜多川行麿画、蔦屋板）

→桃太郎・酒呑童子・久米仙人等を綯い交ぜにする。鳥山検校の松葉屋瀬川落籍の一件を踏まえる。

★『鬼通意嘘嶌物語』（三巻、信鮒作、旭光画、伊勢治板）

→川から芋を拾って食べた爺が若返り、妻との間に芋太郎が生まれる。芋太郎は親に勘当され、猫・狐・狸を伴って鬼ヶ島に渡る。

天明六年（一七八六）

★『昔語鬼十八』刊行か　※安永八『桃太郎元服姿』の改題再摺本。

天明八年（一七八八）

★『海中箱入姫』（三巻、七珍万宝作、北尾政美画、西宮板）

→桃太郎・浦島太郎・玉取り・俵藤太を綯い交ぜにし、龍宮にちなんだ話を吹き寄せたもの。

寛政元年（一七八九）

●『桃太郎昔日記』（三巻、北尾政治美画、村田屋板）

→桃太郎・舌切雀を綯い交ぜにする。

★『大福帳点雉犬狐』　※『安永七郎犬福帳』の改題再摺本。

寛政四年（一七九二）

●『山入桃太郎昔噺』（三巻、菊舟画、村田屋板）

→後日譚。桃太郎の近村に住む百姓福兵衛が猿・犬・雉の夢をみて、三つ子を得る。後に三つ子は桃太郎と共に大江山の鬼退治に出掛ける。

寛政五年（一七九三）

●『昔々／桃太郎発端話説』[注12]（三巻、山東京伝作、勝川春朗画、蔦屋板）

→桃太郎・舌切雀等を綯い交ぜにする。

寛政七年（一七九五）

●『桃太郎大江山入』（三巻、桜川慈悲成作、歌川豊国画、西村屋板）

→桃太郎と坂田金時の大江山鬼退治を綯い交ぜにする。十二歳の桃太郎が伊勢参りに出発し、犬・猿・猪・熊・雉等を供にしてゆく。

★『桃食三人子宝噺』（二巻、市場通笑作、栄松斎長喜画、村田屋板）

→桃太郎と金太郎が一緒に化物退治をする。

寛政十年（一七九八）

★『めりやす長うた／二文字鬼角文字』（二巻、桜川慈悲成作、歌川豊国画、西村屋板）

→後日譚。二度の桃太郎来訪で虎皮の褌を奪われた鬼たちは猫皮の褌を締めることとなり、めりやす・長唄が流行する。

享和三年（一八〇三）

●『桃太郎後日物語／初宝鬼島台』（二巻、十返舎一九作、北尾重政画、西村屋板）

→後日譚。桃太郎が今年も変わらず鬼が島へ行くと、洒落の世の中になっている。桃太郎は、鬼たちが体の色を流行色に染めたり、虎皮の褌を越中縮緬にしているのを見て再び退治し、元の姿に戻す。改心した鬼は鬼の念仏姿となる。

文化二年（一八〇五）

○『御子様がた御のぞみに付／昔話桃太郎伝』（三巻、百済画、南杣笑楚満人作、西村屋板）

→「桃太郎」の基本の形にほぼ忠実なもの。

二　考察

右に挙げた草双紙を通観してみると、全般的に、「桃太郎」の基本の形をある程度残した上で様々なアレンジを加えていることがわかる。

その主な方法は、桃太郎と同様に赤本の題材となっている「舌切雀」や「花咲爺」といった昔話の世界を複数綯い交ぜるというものであるが、今回挙げた限りでは黄表紙の例に限られており、黒本青本にはみられない。

一方、黒本青本の手法は、天明期の黄表紙のように多数の異なる世界を綯い交ぜるといった手法はとっていないものの、やはり他文芸の摂取が確認できる。

例えば、『百太老寿草紙』は、作品冒頭で猿を使って盗みを働く「うつぼ屋武清治」という人物が登場し、五喜平と悪事を企む。すぐに武清治は捕まり、五喜平は猿を連れて故郷に逃げ帰るが、この挿話は何かしらの典拠があるような印象を受ける。また、桃園が身をやつした惟盛と恋仲になるという場面は、延享四年（一七四七）大坂竹本座初演の浄瑠璃「義経千本桜」に依るもので、江戸では明和元年（一七六四）年外記座での上演が確認されている。この「義経千本桜」の摂取については、特定の浄瑠璃上演との関係を明確にし難いものの、江戸での上演の影響を受けたものと推察される。

明和七年刊の『昔噺／祖父と婆々』には、そのころ評判であった笠森おせんが登場する。これには明らかに当時の流行を取り入れようとする意図がみられる。笠森おせんの評判や明和七年二月のおせん出奔騒動、その際に生まれた「とんだ茶釜が薬鑵に化けた」という流行語などを作品の趣向に用いた草双紙は、他にも確認され、[注13]黒本青本が時事的なものを作中に取り込む性質を持っていたことが看取される。

もちろんこれらの例は、鬼が本田髷をしたり（『桃太郎後日噺』）、めりやす・長唄をうたったり（『めりやす長うた／二文字鬼角文字』）、越中縮緬の褌を締める（『桃太郎後日物語／初宝鬼島台』）のとは趣が異なるが、趣向に差はあれ、既存の文芸にいかに新たな要素を加えて変化を持たせるかという工夫がなされている点では、黒本青本も黄表紙も変わりがないように思われる。

黄表紙を取り上げる際、諧謔性やうがちといった黄表紙ならではの特質がみられない作品について、黒本風であるとか、黄表紙らしくないといった評価がなされることがある。しかし、そのような作品は黒本青本からの草双紙の流れを穏当に受け継いだ作品だともいえ、赤本以来の草双紙の流れの中では、むしろその方が「草双紙らしい」と評価できる可能性がある。また、このような作品が長きに亘って新たに作り出され、刊行され続けたということは、読者側の需要があったことを示すものと考えられる。

また、『昔噺／祖父と婆々』の冒頭に、「むかし〳〵ぢゝは山へしばかりにばゝは川へせんたくにひさしいものと御

わらいもかえりみづふるき所はせんたくをいたしあらいながしてあらたまのはるのはしめの御わらいくさ」という一節がある。これには、「桃太郎」ではありきたりで新鮮味がないので、桃を南瓜に変えることによって新しい趣向とするといった趣旨が窺われる。

「桃太郎」を初めとする昔話の世界をありきたり、つまりなじみ深いものと捉える方法は黄表紙に多くの例が見られる。

例えば、『昔々／桃太郎発端話説』には「こどもしゆ御ぞんじのおにがしまいぬさるきじがちうしんはなし」という一節がある。既に先学が指摘しているように、「子供衆御存じの」とか「お子様方おなじみの」といった言い回しは、黄表紙での常套句で実際の読者そのものを指すとは限らない。しかし、この場合は本当に、子供だったら誰でも知っている、かつて子供であった大人ももちろん知っている「桃太郎」、ということになるであろう。

赤本がどのような形で享受されたのかについては明らかでない点も多いが、木村八重子氏によって、現存の草双紙の中に「既にある版木を用いて摺刷し、極端な例では殆ど読むに耐えないほどの作品もあ」ること、それは「版木がそのように摩滅するまで享受者に支持された証拠にほかならない」との指摘がされている。[注14] 本稿で取り上げた「桃太郎」もまた、基本の形に忠実な赤本のような作品については、「享受者に支持された」作品に該当するもので、再摺が繰り返され、長年に亘って刊行されたものと考えられる。

よって、基本に忠実な形の「桃太郎」は読者に受け入れられなかった訳ではなく、むしろ人々にとってなじみ深いものであったと考えられる。そして、その土壌の上に一連の、アレンジされた「桃太郎」物草双紙が成り立っていたものと考えるのが妥当であろう。

おわりに

今回は「桃太郎」について検討を試みたが、他にも内ケ崎氏が「五大昔話」として取り上げているものはもちろん、嫁入物、化け物種など初期草双紙において頻繁に材に採られた世界が、その後の草双紙でも題材や趣向として使用されていることが確認できる。

これらがいかに活用されたのかを追い、その変遷を明らかにすることで、草双紙の実態を編年的に追うことができると見込まれる。現時点での印象としては、担当画作者などに偏りがあり、初期草双紙に頻用された事物を好んで用いた特定の作者の存在を感じさせる。

ただし、これまで調査対象は先行研究で影印・翻刻され

たものに依るところが大きく、確証はない。今後、作者の発表作品数や当時の発行部数、現在の残存数などの問題を踏まえた上で、様々な作品を検討していきたい。

注

1　他に享和二年（一八〇二）刊『又焼直鉢冠姫／稗史億説年代記』（式亭三馬作・画、西宮板）等がある。

2　拙稿「草双紙における流行語の位置」（『近世文芸』第六十八号、平成十年六月）参照。

3　拙稿「明和三年鱗形屋板草双紙に関する検討」（『実践国文学』第七十三号、平成二十年三月）参照。

4　勝田敏勝「『あんぽんたん』（黒本）翻字と解説」（『叢』第二号、昭和五十四年十一月）、『江戸の絵本Ⅱ』（昭和六十二年、国書刊行会）

5　徳永結美「『風流／桃太郎柿太郎／勇力競』」（『叢』第二十七号、平成十八年二月）

6　有働裕「『昔噺／祖父と婆々』について」（『叢』第十三号、平成二年七月）

7　服部康子「『再板／桃太郎昔語』について」（『叢』創刊号、昭和五十四年四月）、『近世子どもの絵本集江戸篇』（平成元年、国書刊行会）、『江戸の絵本Ⅳ』（平成元年、国書刊行会）

8　『江戸の戯作絵本（一）』（現代教養文庫、昭和五十五年、社会思想社）所収。

9　内ケ崎有里子「『桃太郎一代記』について」（『叢』第十七号、平成七年五月）、『江戸期昔話絵本の研究と資料』笹本まり子「『昔咄し虚言桃太郎』について」（『叢』第二十七号）

10　松浦史料博物館蔵（未見）。『黄表紙総覧』他参照。

11　『山東京傳全集第三巻黄表紙3』（平成十三年、ぺりかん社）他所収。

12　拙稿「富川房信画『とんだ茶釜』考」（『実践国文学』第六十号、平成十三年十月）参照。

13　「日本小説年表」考　黒本・青本を中心に」（『江戸文学』第十五号、平成十二年五月、ぺりかん社）参照。他に、『近世子どもの絵本集江戸篇』に、「内容に時代性を盛り込まない素朴な作品、または繰り返し上演する演目の筋書きなどは、内容として寿命が長いから、版木の保管が万全であれば、五十年と見積もっても、初期の版木で享保（一七六一―三六）初年、末期の版木で寛政（一七八九―一八〇一）末年まで使用できた可能性がある」との指摘がある。

14

（まつばら　のりこ・実践女子大学非常勤講師　実践女子大学大学院博士課程平成十四年度単位取得満期退学）